

生誕150年の漱石ブーム 他の文学遺産にも光を

先月、没後100年の命日を迎えた夏目漱石をめぐる出版ラッシュは、とどまる気配がない。漱石と関わりが深い岩波書店が、全28巻の『定本 漱石全集』の刊行を始めただけでなく、漱石夫人、夏目鏡子の回想録『漱石の思ひ出』を新装復刊。岩波新書では漱石研究者、十川信介氏による評伝『夏目漱石』はじめ、漱石関連の本を相次ぎ出版した。さらに、漱石の小品集『夢十夜』を原作にした近藤ようこ氏の漫画のウェブ連載も、近く単行本化される。

他社でも、ミネルヴァ書房が比較文学研究者の佐々木英昭氏による評伝『夏目漱石』を刊行したほか、生誕150年の今年にかけて漱石関連本の出版が続いている。そこには、漱石の実生活を克明に見つめた十川氏の評伝など、貴重な研究成果も含まれるが、他の多くの近代文学の作家と比べると「漱石ばかりが、なぜもてる」という感慨もまた禁じ得ない。

「苦しいときの漱石頼み、という面がある」と話すのは、出版ニュース社の清田義昭代表。「漱石ものとなれば、学校の図書館も購入を検討し、一定程度の発行部数が見込める」という。「国民作家」は、歌舞伎や文楽でいう「忠臣蔵」のような題材というわけだ。

そんなことを思いつつ書店を歩いていたら、思わぬ書名が、目に飛び込んできた。『いま、漱石以外も面白い』（濤標）。詩人倉橋健一氏が古今東西の文学作品について語った読書会の講話を、ジャーナリストの今西富幸氏が筆録した新聞連載の単行本化で、漱石の作品は小説『行人』だけ。徳田秋声『あらくれ』、里見弴『極楽とんぼ』、三好達治『測量船』といった忘れられがちな日本の近現代文学や外国文学の名作を数多く取り上げ、その魅力を簡明に語った。中には、川端康成『雪国』に、主人公の男の乱反射する美意識を読みとるといふ卓見もある。

確かに、面白いのは漱石だけではない。明治が始まり来年で150年。たとえ逆境にあっても、その文学遺産を眠らせない新鮮な発想が求められている。